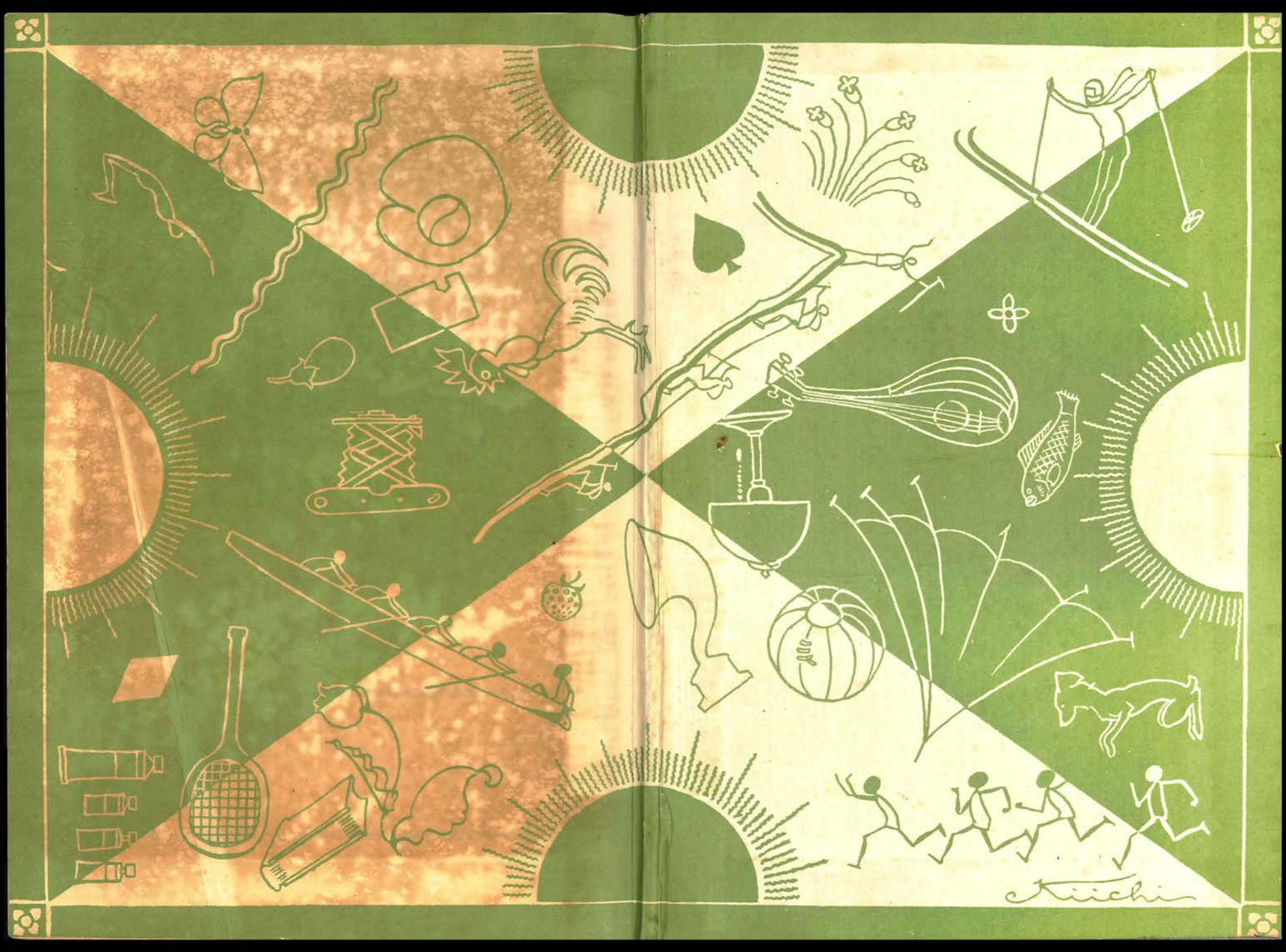
1929

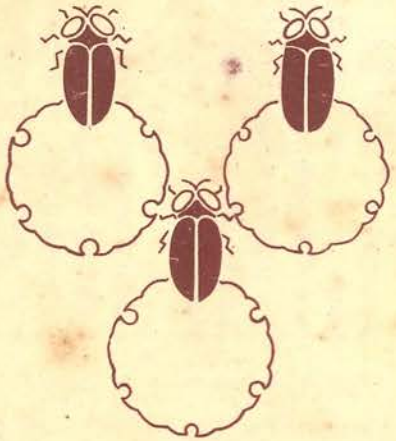
アサヒ日記

◆1929◆

朝日新聞社版◆


Kiichi

アサヒ日記 こども用



1929

朝日新聞社版

所有者姓名

學校の諸先生および父兄のかたがたへ

人の一生は一日一日、一秒一秒のあつまりです。その一日一秒は決してゆるがせになりません。これを忠實に各自のものとし、刹々に過去を顧み、現在を考へ、將來を慮って、國家のため社會のため、すぐれた人となるには、日記をつける習慣を養ふことも、もっとも適當な方法の一つです。

それにはいゝ日記帳が必要です。この「**アサヒ日記**」はかういふ趣意のもとに、教育、運動競技、衛生、文學、美術などの諸大家を編輯顧問とし、本文記入欄を初め日常生活に必要な參考資料その他、實益と趣味とを兼ねるやう、あらゆる注意を拂って、まづ小學校の上級ならびに中學校、女學校の生徒のかたがたの分を作りました。

どうぞ皆樣の愛しいつくしむ第二の國民の幸福のために、この「**アサヒ日記**」を十分に御利用くださるやう希望いたします。

編輯顧問

東京女子高等師範學校教授　倉橋惣三
東京高等師範學校教授附屬小學校主事　佐々木秀一
大日本體育協會理事　辰野保
文部省體育研究所技師學校衛生官　醫學博士　吉田章信
島崎藤村
杉村楚人冠
野口雨情
岡本歸一

編輯委員

（東京朝日新聞社内）
土岐善麿
成澤玲川
星野辰男
小林秀二郎

裝幀およびカット　岡本歸一

昭和四年暦

西暦紀元	即位紀元
一九二九	二五八九

大 一月 三月 五月 七月 八月 十月 十二月

四方拜　一月一日
元始祭　一月三日
大新年宴會　一月五日
節分　二月三日
紀元節　二月十一日
立春　二月四日
春季皇靈祭　三月二十一日
神武天皇祭　四月三日
天長節　四月二十九日
秋季皇靈祭　九月二十三日
神嘗祭　十月十七日
明治節　十一月三日
新嘗祭　十一月二十三日
大正天皇祭　十二月二十五日

小寒　一月六日
大寒　一月二十日
春雞初午祭　二月六日
春分　三月三日
八十八夜　五月二日
入梅　六月十一日
夏至　六月二日
小暑　七月八日
大暑　七月二十三日
立秋　八月八日
二百十日　九月一日
二百二十日　九月十一日
秋分　九月二十三日
立冬　十一月八日
冬至　十二月二十二日

地久節　三月六日
皇太后陛下御誕辰　六月二十五日
陸軍記念日　三月十日
海軍記念日　五月二十七日
釋尊降誕會　四月八日
クリスマス　十二月二十五日

小 二月 四月 六月 九月 十月 十一月

土用入　七月二十日
彼岸入　三月十八日　九月二十日

日曜表	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
	6	3	3	7	5	2	7	4	1	6	3	1
	13	10	10	14	12	9	14	11	8	13	10	8
	20	17	17	21	19	16	21	18	15	20	17	15
	27	24	24	28	26	23	28	25	22	27	24	22
			31			30			29			29

皇室

第百二十四代

今上天皇陛下

御名 裕仁（ヒロヒト） 大正天皇第一皇男子

御降誕 明治三十四年四月二十九日
立太子式 大正五年十一月三日
御成年式 大正八年五月七日
摂政御就任 大正十年十一月二十五日
御践祚 昭和元年十二月二十五日
御即位礼 昭和三年十一月十日

皇后陛下

御名 良子（ナガコ） 久邇宮邦彦王第一女子

御誕生 明治三十六年三月六日
御入輿 大正十三年一月二十六日
立皇后 昭和元年十二月二十五日

皇太后陛下

御名 節子（サダコ） 故従一位大勲位公爵九條道孝第四女子

御誕生 明治十七年六月二十五日

照宮成子内親王（テルノミヤシゲコ） 今上天皇第一皇女子 大正十四年十二月六日御誕生

澄宮崇仁親王（スミノミヤタカヒト） 大正天皇第四皇男子 大正四年十二月二日御誕生

皇族

秩父宮

大勲位陸軍歩兵中尉 **雍仁親王**（ヤスヒト） 大正天皇第二皇男子 明治三十六年六月十五日御誕生

妃 勢津子（セツコ） 久邇宮邦彦王第三女子 明治三十年十月九日御誕生

高松宮

大勲位海軍中尉 **宣仁親王**（ノブヒト） 大正天皇第三皇男子 明治三十二年十月十八日御誕生

伏見宮

大勲位功四級海軍大将 **博恭王**（ヒロヤス） 故貞愛親王第一男子 明治十年十月十六日御誕生

妃 経子（ツネコ） 故公爵徳川慶喜第十女 明治三十五年九月九日御誕生

動一等海軍大尉 **博義王**（ヒロヨシ） 博恭王第十一男子 明治三十年十二月八日御誕生

妃 二等朝子（トモコ） 故侯爵鍋島直大第二女子 明治二十年二月二日御誕生

動一等 **伊都子**（イクコ） 故侯爵鍋島直大第二女子 明治二十年五月二日御誕生

妃 **守正王**（モリマサ） 故朝彦王第四男子 明治七年三月九日御誕生

大勲位功四級陸軍大将 **梨本宮**

徳彦王（ノリヒコ） 多嘉王第二男子 大正九年三月十七日御誕生

家彦王（イヘヒコ） 多嘉王第二男子 大正九年三月十七日御誕生

大勲位陸軍歩兵大佐 **鳩彦王**（ヤスヒコ） 故朝彦王第八男子 明治二十年十月二日御誕生

妃 允子内親王（ノブコ） 故天皇第八女子 明治四十年十一月十一日御誕生

動一等 **紀久子女王**（キクコ） 鳩彦王第一男子 明治三十年九月十四日御誕生

孚彦王（タカヒコ） 鳩彦王第一男子 大正元年十月八日御誕生

正彦王（タダヒコ） 鳩彦王第二男子 大正三年二月五日御誕生

湛子女王（キヨコ） 鳩彦王第二女子 大正八年二月二日御誕生

朝香宮

鳩彦王（ヤスヒコ） 故朝彦王第八男子 明治二十年十月二日御誕生

動一等陸軍騎兵大尉 **恒憲王**（ツネノリ） 故邦憲王第一男子 明治三十年一月三日御誕生

妃 二等敏子（トシコ） 故公爵九條道実第五女子 明治十年六月十日御誕生

故邦憲王妃 動一等 **好子**（ヨシコ） 故侯爵鍋島直大第一女子 明治十年十二月二日御誕生

邦壽王（クニナガ） 恒憲王第一男子 大正二年十一月一日御誕生

美智子女王（ミチコ） 恒憲王第二女子 大正十年十二月九日御誕生

賀陽宮

茂麿王（シゲマロ） 故賀陽王第五男子 明治二十年十月一日御誕生

故菊麿王妃 動一等 **常子**（ツネコ） 故義親王第三女子 明治三十年七月二日御誕生

動一等海軍大尉 **武彦王**（タケヒコ） 故賀陽王第十一男子 明治三十年二月十三日御誕生

山階宮

邦芳王（クニカ） 故貞愛親王第二男子 明治十年十月三日御誕生

博英王（ヒロヒデ） 故恭王第四男子 大正元年十月四日御誕生

治憲王（ハルノリ） 恒憲王第二男子 大正十五年七月三日御誕生

恭仁子女王（クニコ） 多嘉王第六女子 大正六年八月十日御誕生

動一等 **靜子**（シズコ） 故忠愛公爵水無瀬子女 明治七年九月十日御誕生

妃 **多嘉王**（カ） 故朝彦王第五女 明治十年十月十三日御誕生

邦英王（クニヒデ） 故朝彦王第五男子 明治十年八月十日御誕生

朝子女王（アサコ） 故朝彦王第二女 昭和二年十月十日御誕生

正子女王（マサコ） 朝彦王第一女 大正十年八月五日御誕生

動妃 二等 **知子**（トモコ） 博恭王第三女 明治十四年八月十日御誕生

動一等 **朝融王**（アサアキラ） 朝彦王第十一男子 明治三十年二月二日御誕生

動妃 一等 **倪子**（チカコ） 故公爵鍋島直大第七女子 明治二十年十月十九日御誕生

久邇宮

大勲位功四級陸軍大将 **邦彦王**（クニヒコ） 故朝彦王第三男子 明治六年七月二十三日御誕生

治憲王（ハルノリ） 恒憲王第二男子 大正十五年七月三日御誕生

恭仁子女王（クニコ） 多嘉王第五女子 大正十年八月十日御誕生

動妃 一等 **靜子**（シズコ） 故忠愛公爵水無瀬子女 明治七年九月十日御誕生

大勲位 神宮祭主 **多嘉王**（カ） 故朝彦王第五男子 明治八年八月十七日御誕生

邦英王（クニヒデ） 故朝彦王第五男子 明治十年八月十日御誕生

朝子女王（アサコ） 朝彦王第二女 昭和二年十月十日御誕生

正子女王（マサコ） 朝彦王第一女 大正十年八月五日御誕生

動妃 二等 **知子**（トモコ） 博恭王第三女 明治十四年八月十日御誕生

動一等海軍中尉 **朝融王**（アサアキラ） 朝彦王第十一男子 明治三十年二月二日御誕生

動妃 一等 **倪子**（チカコ） 故公爵鍋島直大第七女子 明治二十年十月十九日御誕生

久邇宮

大勲位功四級陸軍大将 **邦彦王**（クニヒコ） 故朝彦王第三男子 明治六年七月二十三日御誕生

照宮成子内親王（テルノミヤシゲコ） 今上天皇第一皇女子 大正十四年十二月六日御誕生

澄宮崇仁親王（スミノミヤタカヒト） 大正天皇第四皇男子 大正四年十二月二日御誕生

東久邇宮

大勲位陸軍歩兵大佐 稔彦王 故朝彦王第九男子明治二十二年三月三日御誕生

妃 勲一等 聰子内親王 明治天皇第九皇女子明治二十九年五月十一日御誕生

盛厚王 稔彦王第一男子大正五年五月六日御誕生

彰常王 稔彦王第三男子大正九年五月十三日御誕生

北白川宮

永久王 故成久王第一男子明治十三年三月十四日御誕生

故成久王妃勲一等 房子内親王 明治天皇第七女子明治二十年二月十八日御誕生

故能久親王妃勲一等 富子 故公爵島津久光養女久子文久二年十月一日御誕生

美年子女王 故成久王第一女子明治四十五年六月六日御誕生

佐和子女王 故成久王第二女子大正二年十一月十一日御誕生

多恵子女王 故成久王第三女子大正九年四月十五日御誕生

竹田宮

恒德王 故恒久王第一男子明治四十二年三月四日御誕生

故恒久王妃勲一等 昌子内親王 明治天皇第六皇女子明治二十一年十一月九日御誕生

禮子女王 故恒久王第一女子大正二年七月四日御誕生

閑院宮

大勲位功二級元帥陸軍大將 載仁親王 故邦家親王第六男子慶應三元年九月二十三日御誕生

妃 一等 智恵子 故公爵三條實美第二女子明治十五年六月三日御誕生

騎兵中尉 春仁王 故邦家親王第二男子明治三年十五日御誕生

妃勲二等 直子 故公爵一條實輝第一女子明治四十一年十一月七日御誕生

東伏見宮

故依仁親王妃勲一等 周子 故公爵岩倉具定第一女子明治八年二月十九日御誕生

祝祭日

四方拜 元日のあさ早く天皇陛下神嘉殿に臨御して、天地四方および山陵を拜し、年災をはらひ、泰平を祈らせたまふ御儀。

元始祭 皇位の元始を祝する意味で、賢所並に天神・地祇・御歴代の皇靈を親しくお祭り遊ばされる御儀。

新年宴會 天皇陛下豐明殿に出御、親任官・外國使臣等に宴をたまふ御儀。

紀元節 神武天皇が大和國橿原宮で御位に即き給ひし日を記念する御儀。

春季皇靈祭 毎年三月春分、天皇親しく皇靈殿に出御、歴代の天皇・皇后・皇妃・皇親および後に尊號を上れる天皇の神靈を祀りたまふ御儀。

神武天皇祭 神武天皇崩御の日としてその神靈を祀り奉る御儀。

天長節 天皇陛下の御誕辰。

秋季皇靈祭 九月秋分に行はせられる。次第は春季皇靈祭に同じ。

神嘗祭 伊勢神宮にその年の初穂を奉る御儀。

明治節 明治天皇御誕辰の日を記念する御儀。

新嘗祭 天皇が新穀をきこしめし給ふに方り、先づそれを天神・地祇に供したまふ御儀。

大正天皇祭 大正天皇崩御の日、その神靈を祀り奉る御儀。

地久節 皇后陛下の御誕辰。

教育ニ關スル勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン

斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ倶ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト倶ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名御璽

五箇條ノ御誓文

（明治元年三月十四日）

一 廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スヘシ

一 上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フヘシ

一 官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメンコトヲ要ス

一 舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ

一 智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ

年數表

年次	皇紀	西紀	年數
文化七年	二四七〇	一八一〇	一〇〇
八年	二四七一	一八一一	一〇一
九年	二四七二	一八一二	一〇二
一〇年	二四七三	一八一三	一〇三
一一年	二四七四	一八一四	一〇四
一二年	二四七五	一八一五	一〇五
一三年	二四七六	一八一六	一〇六
一四年	二四七七	一八一七	一〇七
文政元年	二四七八	一八一八	一〇八
二年	二四七九	一八一九	一〇九
三年	二四八〇	一八二〇	一一〇
四年	二四八一	一八二一	一一一
五年	二四八二	一八二二	一一二
六年	二四八三	一八二三	一一三
七年	二四八四	一八二四	一一四
八年	二四八五	一八二五	一一五
九年	二四八六	一八二六	一一六
一〇年	二四八七	一八二七	一一七
一一年	二四八八	一八二八	一一八
一二年	二四八九	一八二九	一一九
一三年	二四九〇	一八三〇	一二〇
天保元年	二四九一	一八三一	一二一
二年	二四九二	一八三二	一二二
三年	二四九三	一八三三	一二三
四年	二四九四	一八三四	一二四
五年	二四九五	一八三五	一二五
六年	二四九六	一八三六	一二六
七年	二四九七	一八三七	一二七
八年	二四九八	一八三八	一二八
九年	二四九九	一八三九	一二九
一〇年	二五〇〇	一八四〇	一三〇
一一年	二五〇一	一八四一	一三一
一二年	二五〇二	一八四二	一三二
一三年	二五〇三	一八四三	一三三
一四年	二五〇四	一八四四	一三四
弘化元年	二五〇五	一八四五	一三五
二年	二五〇六	一八四六	一三六
三年	二五〇七	一八四七	一三七
四年	二五〇八	一八四八	一三八
嘉永元年	二五〇九	一八四九	一三九
二年	二五一〇	一八五〇	一四〇
三年	二五一一	一八五一	一四一
四年	二五一二	一八五二	一四二
五年	二五一三	一八五三	一四三
六年	二五一四	一八五四	一四四
安政元年	二五一五	一八五五	一四五
二年	二五一六	一八五六	一四六
三年	二五一七	一八五七	一四七
四年	二五一八	一八五八	一四八
五年	二五一九	一八五九	一四九
六年	二五二〇	一八六〇	一五〇
七年	二五二一	一八六一	一五一
萬延元年	二五二二	一八六二	一五二
文久元年	二五二三	一八六三	一五三
二年	二五二四	一八六四	一五四
三年	二五二五	一八六五	一五五
元治元年	二五二六	一八六六	一五六
慶應元年	二五二七	一八六七	一五七
二年	二五二八	一八六八	一五八
三年	二五二九	一八六九	一五九
四治元年	二五三〇	一八七〇	一六〇
明治三年	二五三一	一八七一	一六一
二年	二五三二	一八七二	一六二
三年	二五三三	一八七三	一六三
四年	二五三四	一八七四	一六四
五年	二五三五	一八七五	一六五
六年	二五三六	一八七六	一六六
七年	二五三七	一八七七	一六七
八年	二五三八	一八七八	一六八
九年	二五三九	一八七九	一六九
一〇年	二五四〇	一八八〇	一七〇
一一年	二五四一	一八八一	一七一
一二年	二五四二	一八八二	一七二
一三年	二五四三	一八八三	一七三
一四年	二五四四	一八八四	一七四
一五年	二五四五	一八八五	一七五
一六年	二五四六	一八八六	一七六
一七年	二五四七	一八八七	一七七
一八年	二五四八	一八八八	一七八
一九年	二五四九	一八八九	一七九
二〇年	二五五〇	一八九〇	一八〇
二一年	二五五一	一八九一	一八一
二二年	二五五二	一八九二	一八二
二三年	二五五三	一八九三	一八三
二四年	二五五四	一八九四	一八四
二五年	二五五五	一八九五	一八五
二六年	二五五六	一八九六	一八六
二七年	二五五七	一八九七	一八七
二八年	二五五八	一八九八	一八八
二九年	二五五九	一八九九	一八九
三〇年	二五六〇	一九〇〇	一九〇
三一年	二五六一	一九〇一	一九一
三二年	二五六二	一九〇二	一九二
三三年	二五六三	一九〇三	一九三
三四年	二五六四	一九〇四	一九四
三五年	二五六五	一九〇五	一九五
三六年	二五六六	一九〇六	一九六
三七年	二五六七	一九〇七	一九七
三八年	二五六八	一九〇八	一九八
三九年	二五六九	一九〇九	一九九
四〇年	二五七〇	一九一〇	二〇〇
四一年	二五七一	一九一一	二〇一
四二年	二五七二	一九一二	二〇二
四三年	二五七三	一九一三	二〇三
四四年	二五七四	一九一四	二〇四
四五年	二五七五	一九一五	二〇五
大正元年	二五七六	一九一六	二〇六
二年	二五七七	一九一七	二〇七
三年	二五七八	一九一八	二〇八
四年	二五七九	一九一九	二〇九
五年	二五八〇	一九二〇	二一〇
六年	二五八一	一九二一	二一一
七年	二五八二	一九二二	二一二
八年	二五八三	一九二三	二一三
九年	二五八四	一九二四	二一四
一〇年	二五八五	一九二五	二一五
一一年	二五八六	一九二六	二一六
一二年	二五八七	一九二七	二一七
一三年	二五八八	一九二八	二一八
一四年	二五八九	一九二九	二一九
昭和元年	二五九〇	一九三〇	二二〇
二年	二五九一	一九三一	二二一
三年	二五九二	一九三二	二二二
四年	二五九三	一九三三	二二三
五年	二五九四	一九三四	二二四
六年	二五九五	一九三五	二二五
七年	二五九六	一九三六	二二六
八年	二五九七	一九三七	二二七
九年	二五九八	一九三八	二二八
一〇年	二五九九	一九三九	二二九
一一年	二六〇〇	一九四〇	二三〇
一二年	二六〇一	一九四一	二三一
一三年	二六〇二	一九四二	二三二
一四年	二六〇三	一九四三	二三三
一五年	二六〇四	一九四四	二三四
一六年	二六〇五	一九四五	二三五
一七年	二六〇六	一九四六	二三六
一八年	二六〇七	一九四七	二三七
一九年	二六〇八	一九四八	二三八
二〇年	二六〇九	一九四九	二三九
二一年	二六一〇	一九五〇	二四〇
二二年	二六一一	一九五一	二四一
二三年	二六一二	一九五二	二四二
二四年	二六一三	一九五三	二四三
二五年	二六一四	一九五四	二四四
二六年	二六一五	一九五五	二四五
二七年	二六一六	一九五六	二四六
二八年	二六一七	一九五七	二四七
二九年	二六一八	一九五八	二四八
三〇年	二六一九	一九五九	二四九
三一年	二六二〇	一九六〇	二五〇
三二年	二六二一	一九六一	二五一
三三年	二六二二	一九六二	二五二
三四年	二六二三	一九六三	二五三
三五年	二六二四	一九六四	二五四
三六年	二六二五	一九六五	二五五
三七年	二六二六	一九六六	二五六
三八年	二六二七	一九六七	二五七
三九年	二六二八	一九六八	二五八
四〇年	二六二九	一九六九	二五九
四一年	二六三〇	一九七〇	二六〇
四二年	二六三一	一九七一	二六一
四三年	二六三二	一九七二	二六二
四四年	二六三三	一九七三	二六三
四五年	二六三四	一九七四	二六四
大正元年	二六三五	一九七五	二六五
二年	二六三六	一九七六	二六六
三年	二六三七	一九七七	二六七
四年	二六三八	一九七八	二六八
五年	二六三九	一九七九	二六九
六年	二六四〇	一九八〇	二七〇
七年	二六四一	一九八一	二七一
八年	二六四二	一九八二	二七二
九年	二六四三	一九八三	二七三
一〇年	二六四四	一九八四	二七四
一一年	二六四五	一九八五	二七五
一二年	二六四六	一九八六	二七六
一三年	二六四七	一九八七	二七七
一四年	二六四八	一九八八	二七八
昭和元年	二六四九	一九八九	二七九
二年	二六五〇	一九九〇	二八〇
三年	二六五一	一九九一	二八一
四年	二六五二	一九九二	二八二

學校ごよみ

月	日	事
一月	一日	四方拜
	三日	元始祭
	日	第三學期始業式
二月	十一日	紀元節 憲法發布記念日
三月	六日	地久節
	十日	陸軍記念日
	廿一日	春季皇靈祭
	日	卒業式・終業式
	日	今日から學年末休暇
四月	日	始業式・入學式
	三日	神武天皇祭
	廿九日	天長節
五月	廿七日	海軍記念日
六月	一日	今日から帽子に日覆
	十日	時の記念日
	廿五日	皇太后陛下御誕辰
七月	日	今日から午後休業
	日	第一學期終業式
	日	今日から暑中休暇
八月	三十日	日韓併合記念日
九月	日	第二學期始業式
	日	今日から午後の授業開始
	廿三日	秋季皇靈祭
十月	一日	帽子の日覆を取る
	十三日	戊申詔書下賜記念日
	十七日	神嘗祭
	三十日	教育勅語下賜記念日
十一月	三日	明治節
	廿三日	新嘗祭
十二月	廿五日	大正天皇祭
	日	第二學期終業式
	日	今日から冬季休業
	日	開校記念日
	日	學藝會
	日	父兄懇話會
	日	春季運動會
	日	秋季運動會
	日	成績品展覽會
	日	氏神祭禮

御自分の寫眞
をおはり下さい

撮影日	所場	記錄
年　月　日		

一月豫定表

1 (火)		17 (木)	
2 (水)		18 (金)	
3 (木)		19 (土)	
4 (金)		20 (日)	
5 (土)		21 (月)	
6 (日)		22 (火)	
7 (月)		23 (水)	
8 (火)		24 (木)	
9 (水)		25 (金)	
10 (木)		26 (土)	
11 (金)		27 (日)	
12 (土)		28 (月)	
13 (日)		29 (火)	
14 (月)		30 (水)	
15 (火)		31 (木)	
16 (水)			

一月一日　火　天氣　晴風強し

四方拜

今年より日記をつけることにきめた。

とうとう紙くずを毎日書くことを実行しないと形ばかりする。

大晦日。祖父様のやうに子供等をおまえと共つれて行き、おまえを待ちながら、こちらが待ちわびられる迄、祖父様割り勘と称づうをして、おそろしいなり、四時迄待いつた。そうなると百姓なし、母様へ子供と一緒に我れ行くつもりでいなかつた。俺は思ふ、祖父様らと、おばちゃ、すごろくをして遊ぶ。本枕はげし。

豐臣秀吉は天文五年に尾張國愛知郡中村といふ所に生れた百姓の子でしたが、後に出世して朝鮮征伐までした英雄です。（天文、五、一、一生——三九三年前）

この日、午後九時、敵將ステッセルと乃木將軍との間に旅順開城降伏條件が成立しました。（明治、三八、一、二——二四年前）

一月二日

水　天氣　晴

午後より中はせにピアノの稽古、其中にて行く。子供らのピアノをさく。

子供のうちとせん遊び、夕食の時はまんまん花をあへる。　そもそもと事始めなり。

おれはあきまし。

一月三日

木　天氣　晴

元始祭

午前中れんと幸ちゃんと花ちゃんと一緒に見る。午後三時頃にくる。午後三時頃にくる。子供らの同じ来り、花月遊ばされる。子供らの書初をする、「望みをよろこへ」のうたを書く。子刻お幸さんと三人づれで堺へ事始へ行く。

花、一人居なくつりたるが、出る、風呂をもらひとおそくまでかる。一切終る。俗説の故位の二を見つくる。（イククシ）ヒロ。如何にも四方の主張也。

東軍の使者、瀧川播磨守が伏見鳥羽の關門を通らうとした時、京軍の番兵がそれを拒んだのがもとで、伏見鳥羽の戰となりました。（慶應、四、一、三——六一年前）

軍人へ五ケ條の勅諭を賜はりました。(一)軍人は忠節を盡すを本分とすべし(二)軍人は禮節を正しくすべし(三)軍人は武勇を尚ぶべし(四)軍人は信義を重んずべし(五)軍人は質素を旨とすべし。(明治、一五、一、四——四七年前)

一月四日　金　天氣　晴

俺のおぢさんとおきやう。

風を引きやうくしさうに水はなをたらして、きたけがする、風をきらをやめて早くこれはいる

俺おそくおきやうんがなつてんるのでもすかる。

俺年賀状かし書く。

一月五日　土　天氣　晴

新年宴會

いとくかまに風を引いきやうで一日家の中でなくまるし、新年宴の宿題をやつと仕付て寝ちゃうまた。五時三四郎は豆とおとをが逃へちゃつて吹えがうんのらいきう孔子の掛ひむる。明日へまらを迎へんお父さんに行て呉く。

百年戰爭のとき、ジアンダークはみづから神命を受けたと信じ、フランス軍を率ゐて大いにイギリス軍を破りました。オルレアンの少女として尊敬されてゐます。（紀元、一四一二、一、六生――五一七年前）

一月六日　日　天氣　晴

[illegible]

一月七日　月　天氣　晴

今日は年始まき。

七草なしはあるにとて花は

ゴゼゴゼ、スゴロク、トランプ、オハジキをする。主婦

かくしをする。

武内宿禰が初めて大臣になつた。この時から大臣といふ名が起りました。宿禰は五代の天皇に奉仕し、三百歳まで長生きをしました。（成務天皇、三年、一、七――一七九六年前）

明治天皇御踐祚、御歳十六歳、十二月に至つて徳川氏は遂に政權を奉還しました。（慶應、三、一、九——六二年前）

御民われ生けるしるしあり天地の榮ゆる時にあへらく思へば　海犬養岡麿

一月八日　火　天氣　晴

一月九日　水　天氣　晴

一月十日　木　天氣

一月十一日　金　天氣

初めて東京、大阪、名古屋、廣島、熊本、仙臺に鎭臺を置いて、全國の兵制を統一されました。（明治六、一、一〇—五六年前）

千よろづのいくさなりともことあげせずとりて來ぬべき男とぞ思ふ　高橋蟲麿

朝日新聞社、第一回東西定期航空輸送が行はれました。（大正、一二、一、一二——六年前）

一月十二日　土　天氣

午後晴れに向かふ

[illegible]

[illegible]

新春の宵

ねむれや小さき花、
わが胸の春の花、
めでたき夢に、
ねむるは、
この花よ。

ねむれや、
いとしき花、
わが胸の宵の花、
日の照る朝に、
かをるは、
この花よ。

ドイツの子守唄（小林愛雄譯）

一月十三日　日　天氣

午後あけぼのをつれて新宿の方へ行く。

[illegible]

世界平和克復に關する大詔公布。（大正、九、一、一三——九年前）

一月十四日　月　氣天　晴

午後一時より母の方へ。お帰りの時は夜に入りあつた。寒さきびしい。花又多吹の長の巡りをかき、花二付記録。

一月十五日　火　氣天　晴　風強く

はあづれの寒さ。暖かの日田舎へ行くやうなる思ひをした。寒さ俳句の他要用巡りをしのんで、暖かの方の話をしたりして、暮れやすい。近くの家を訪ひて、暮れを出すやうなり。暮れる前平年二度の寒さ。寒暖、極寒、極暖、寒さをあらはす日。二十四度。

一月十六日　水　氣天　晴

あけみはおそきの者日さんかの日田舎田へ行くのはずの日田舎田へ行くの。明日の朝は早く出発。あけみもの日田舎田へ行くのを。明日の朝は早く出発。

一月十七日　木　氣天　晴

あけみ舎橋を使ひて、めさまで日田舎田へ行く。明日の朝は早く出発。明日の朝は早く出発。

伊東祐亨元帥は、日清戦役の時、聯合艦隊司令長官となつて北洋艦隊十二隻を破りました。（大正、三、一、一六死――一五年前）

アメリカへ幕府初めての使節として、勝海舟が遣はしました。（萬延、元、一、一八――六九年前）

一月十八日　金　天氣　晴

昨日の夕方園を出て、[illegible]で、[illegible]行く。まづ[illegible]を出てから[illegible]で西方の[illegible]に[illegible]く。[illegible]たらつなき、きたなきたらつ。全く[illegible]とよこがるい。一日で[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]。

一月十九日　土　天氣　曇

[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]。

ルイ十六世は静に斷頭臺に上り、「余は罪なくして死す、されど余は余の敵を愛す、哀れむべきなんぢ不幸の民」といひ終らないうちにギロチンで殺されました。（紀元、一七九三、一、二一死――一三六年前）

一月二十一日　月　天氣　曇る

[illegible]

一月二十二日　火　天氣　曇

「[illegible]」の[illegible]

[illegible]

一月二十三日　水　天氣　晴、風

[illegible]

一月二十四日　木　天氣

[illegible]

ウキリアム・ピットは、少年でありながらよく國の政治をとりましたから、小ピットといはれてゐます。（紀元、一八〇六、一、二三死――一二三年前）

ジェンナは多くの困難にうち勝つて種痘をはじめました。私達は永くその恩恵を受けてゐます。（紀元、一八二二、一、二六死――一〇七年前）

一月二十五日　金　天氣

今日も腹痛あり。

馬場孤蝶氏を訪ふ

父の伝説について話あり。

一月二十六日　土　天氣

今日もまだ腹痛をかくの

あれ方は春二月三日はじめて花

ちるの。八市氏（伝説氏を嫌）

腹痛ありて足元。

一月二十七日　日　天氣

暑

今日の午後の腹痛、母堂と長男の制止

にもかゝわらず、外出する。碧梧桐より

来年百部の俳句を頼まる。

源賢朝は鎌倉鶴岡参拝の帰り途、僧公暁のために殺されました。これがため源氏の正統は絶えて、政権は全く北條氏のものとなりました。（承久元、一、二七死――七一〇年前）

精神と肉體の躍動を結びつけるものはスポーツである。（安部磯雄）

一月二十八日　月　天氣

一月二十九日　火　天氣

一月三十日　水　天氣

一月三十一日　木　天氣

日英攻守同盟は東洋で利害を共にする日英間に結ばれたものです。（明治、三五、一、三一――二七年前）

感想
新年を過して

二月豫定表

1 (金)		17 (日)	
2 (土)		18 (月)	
3 (日)		19 (火)	
4 (月)		20 (水)	
5 (火)		21 (木)	
6 (水)		22 (金)	
7 (木)		23 (土)	
8 (金)		24 (日)	
9 (土)		25 (月)	
10 (日)		26 (火)	
11 (月)		27 (水)	
12 (火)		28 (木)	
13 (水)			
14 (木)			
15 (金)			
16 (土)			

二月一日 金 氣天

[illegible]

二月二日 土 氣天

[illegible]

福澤諭吉は大分縣中津の人で、明治の新しい文明のため大きな力を添へました。（明治一、三四、二、二死——二七年前）

日本支那間の海底に電信が敷設されました。（明治、四、二、三――五八年前）

二月三日　日　天氣

[illegible]

二月四日　月　天氣

[illegible]

二月五日　火　天氣

[illegible]

聖徳太子は厩戸皇子と申し上げ、御幼少の時から御聰明で、憲法十七ヶ條をお定めになりました。（推古天皇、二九、二、五、薨去――一三〇八年前）

あきれたる母の言葉に氣がつけば
茶碗を箸もてたたきてありき

石川啄木

二月六日 水 氣天

[illegible]

二月七日 木 氣天

[illegible]

二月八日 金 氣天

[illegible]

二月九日 土 氣天

[illegible]

勝つて冑の緒を締めよ。(日本の諺)
我が艦隊は仁川沖で露艦二隻を撃沈しました。(明治、三七、二、九——二五年前)

露國との宣戰詔勅が下り、この戰役で、日本は東洋におけるたしかな地位を定めました。（明治、三七、二、一〇——二五年前）

二月十日

日 天氣 晴

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

二月十一日

月 天氣

紀元節

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

伊藤博文公等が苦心して作りあげた憲法はめてたい紀元節に發布されました。（明治、二二、二、一一——四〇年前）

足利尊氏は十萬の大兵を率ゐて新田義貞の軍と戰ひましたが、全軍敗れて西海の涙に沈みました。（延元、元、二、一三——五九三年前）

二月十二日
火
氣天 晴

二月十三日
水
氣天 晴、風

二月十四日
木
氣天 晴

二月十五日
金
氣天

平將門は謀反をはかりましたが、平貞盛等のために下總國猿島の北山で敗北戰死しました。（天慶、三、二、一四死——九八九年前）

西行法師は藤原憲清といつて、北面の武士でしたが、出家して歌の道にいそしみ、各地の旅に立ちました。「願くは花のもとにて春死なんそのきさらぎのもちづきの頃」。（建久、元、二、一六死――七三九年前）

二月十六日　土　氣天

二月の小鳥

雪の降る日にも
空飛ぶ小鳥、
かはいや二月は
お部屋のなかに、
ねむれ、小鳥、
ねむれ。

暮れゆく軒に
やすめるつばさ、
かはいや二月は
ゐろりのそばに、
ねむれ、小鳥
ねむれ。

イギリスの子守唄（小林愛雄譯）

二月十七日　日　氣天

この夜、わが海軍は敵の戰艦三隻を撃沈させ、海陸から日島および劉公島の砲臺を破壊して、威海衛を占領しました。（明治、二八、二、一七――三四年前）

義經が死地に陷つて弓を拾ひ、那須與一が扇を射當てたのは屋島の戰です。（文治、元、二、一八——七四四年前）
花は散りても香を殘し、人は死しても名を殘す。（日本の諺）

二月十八日　月　天氣

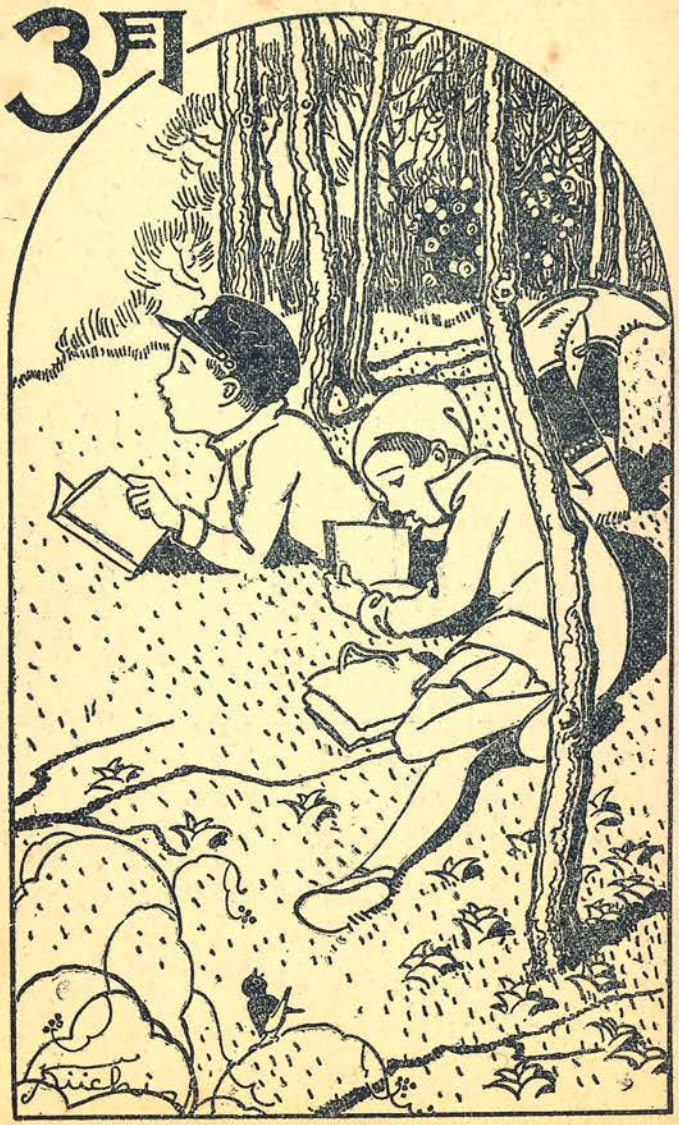
二月十九日　火　天氣

二月二十日　水　天氣

二月二十一日　木　天氣

イギリス皇帝から明治天皇へ御贈進のガーター勳章捧呈式が擧行されました。（明治、三九、二、二〇——二三年前）

梅が香にのつと日の出る山路かな　　芭蕉



感想

春は近づく

スエズ地峽が開通されました。（紀元、一八六九、三、一八――六〇年前）
春がすみたつやおそきと山がはの岩まをくぐるおと聞ゆなり

和泉式部

三月十八日　月　天氣

[illegible]

三月十九日　火　天氣

三月二十日　水　天氣

[illegible]

人生の祝ひ

お七夜　あかんぼが生れて七日目の祝ひ。この日に名をつけます。

宮まゐり　あかんぼが生れて百日目に氏神へまゐる。（三十日目、七十五日目に行ふ地方もあります。）

くひぞめ　あかんぼが生れて百二十日目、初めておまんまをたべる儀式。

初誕生　一年過ぎて最初の誕生日。

初節句　生れてから初めて迎へる節句。

七五三の祝　男の子は三歳と五歳とに、女の子は三歳と七歳とに、その年の十一月十五日に行ひます。新しいきものを着せて、氏神に參詣します。

賀の祝　支那から傳つた風習です。四十歳が初めで、十年毎に行つてゐましたが、足利時代の末から、四十二、六十一、七十七、八十八と祝ふやうになりました。

還暦　六十一歳、本卦返りとも云ひます。

古稀　七十の祝。

喜の字　七十七の祝。太白のもちなど配ります。

米壽　八十八の祝、米の字から思ひついた名です。

ニュートンはイギリスの大學者で、林檎の落ちるのを見て引力の法則を發見したことも逸話の一つです。（紀元、一七二七、三、二〇死――二〇二年前）

弘法大師は支那に渡つて眞言の奥義をきはめ、高野山を開き、ひろく全國をめぐつて、殖産興業のことにも力を盡しました。（承和二、三、三、二一死――一〇九四年前）

三月二十一日　木　天氣

春季皇靈祭

三月二十二日　金　天氣

大阪に着る。

信州新道を通る。

夕、一軒茶屋。陸奥茶屋。

はなれる。高崎より地方

夜のはなれつまあいます。

三月二十三日　土　天氣

シヨオのつ孔雀を

花と宮崎の

の弾、やつやく宮、朝にのる。

伊豆朝宮を、上野、

伊豆宮にはいる。孔雀

金の上中を行く。大倉

の出発。うをれる。

一人二階に宿りく。

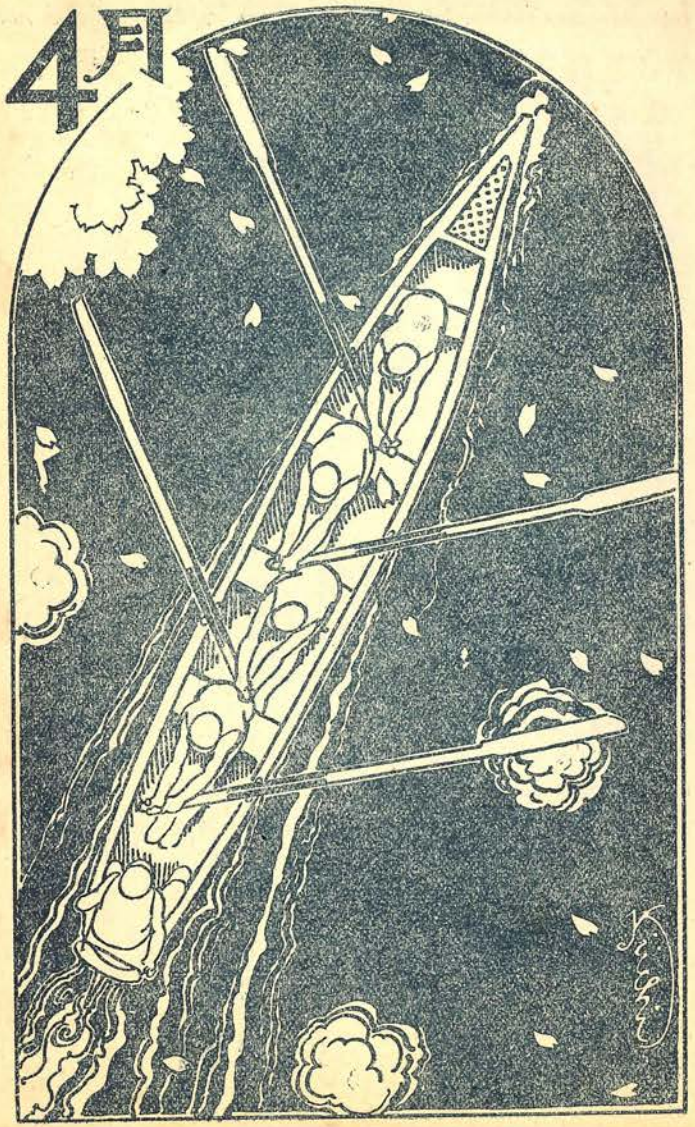
出発は、夕、三、五の午

前は雨。大阪に着る。

初めて各府縣に小學校を設けて、普通教育をひろめられました。（明治、二、三、二三――六〇年前）

春日野の若菜つみにや白妙の袖ふりはへて人のゆくらむ

紀貫之



感想

學年の終り

獨山人の本名は太田南畝。學者で、狂歌の名人、年は七十五。（文政、六、四、六死――一〇六年前）

四月六日　土　天氣

[illegible]

夢の華

ねむれや、
夢の國に、
ゆめの樹を見れば、
華さくこの宵、
ねむれよ。

ねむれや、
夢の國に、
ゆめの樹を振れば、
華散るこの宵、
ねむれよ。

インドの子守唄（小林愛雄譯）

四月七日　日　天氣　雨

[illegible]

アメリカのウイルソン大統領がドイツに向つて宣戰を布告した日。（大正、六、四、七――一二年前）

リンカーン大統領は奴隷の自由を唱へて南部諸州と戰ひ、この日遂に北部諸州の勝利となりました。これを南北戰爭といひます。（紀元、一八六五、四、九――六四年前）

四月八日　月　天氣

釋尊降誕會

四月九日　火　天氣

四月十日　水　天氣

四月十一日　木　天氣

昭憲皇太后は明治天皇崩御の後一年八ヶ月を過ぎて崩御遊ばされました。（大正、三、四、一一崩御――一五年前）

敷島のやまと心を人とはば朝日ににほふ山櫻花

本居宣長

二月

（小の月　二十八日）

三日　節分。豆まき。
四日　立春。
六日　初午祭。
八日　正月事納。針供養。
十一日　紀元節。憲法發布記念日。
十五日　れはん會。

衛生

習慣—極寒の季節となつた。(1)寒氣（ことに夜分）荒風のときは必ず鼻で呼吸し、のどを保護すること(2)塵ほこりの多い場合、特に寒いとき、流感のはやる際などには必ずマスクをかけること。

運動—一月に同じ。雪合戰など大によし。寒さに負けず、毎日缺かさずによく運動するがよい。

注意—(1)暖い室から急に寒い外に出て、運動しないでゐると風を引き易い—感冒は萬病の本。(2)寒い戸外から室内に入り、冷えた手をすぐ火にかざすと手がかゆくなりしもやけを起すから、まづ手と手をよくこすり、少し溫めてから、火にあたること。

私の日記

二月一日　木曜　晴

今日は冬には珍らしい暖な日であつた。學校へ行くと先生からもお友達からも病氣のやうすをたづねられた。少し頭がいたかつたが熱は出なかつた。

夕方神田のをばさんがいらつしやつた。お土產の甘栗がおいしかつた。早くやすんだ妹が寢床で大變せきをした。お母さんは「よし子の後つぎが出來ては困るよ。」とおつしやつた。近頃は大變風がはやる。

二月二日　金曜　晴

學校へ行くと、廣井さんが「けさうちに男の赤ちやんが生れたのよ。」とおつしやつた。九百目もある大きな赤ちやんださうである。おけいこが終つてから兒童自治會があつた。お庭がぬかるので內で遊ぶことや、フツトボールをする時間のことや、落し物のことなどについて相談をした。先生から「たくさんきめるよりも、きめたことをよく實行するやうに。」と注意された。近頃はきめることが多くて實行が足りない。夜仙臺のお兄さんに上げる手紙を書いた。

おもちやの舟

雪のふる夜に
母さんの
膝にもたれて
おもふこと——

あかい帆かけた
玩具の舟は
夏の川原に
忘れた舟は
どこへ流れて
行つたやら

（西條八十）

スポーツ

スキーとスケート

來月になると氷が溶けだすので今月はスケートの名殘を惜しむ意味でも一番盛に行はれる。

スキーは全日本スキー聯盟のスキー選手權大會が開かれる。雪はいよ〳〵深く、スキーヤーは跳躍しつゝ飛び出して行く。我等がスポーツの宮樣と仰ぐ秩父宮殿下なども信越地方によく成らせられる。

× × ×

柔弱な人達は炬燵にあたつて降り積む雪を障子越に眺めながら、寒い寒いをくり返す最中に、自ら好むてその寒い地方に、しかも降り積む雪の中に出掛けて行く氣分これてこそ新興日本を背負つて行けると思はしめる。

月の終になると、寒さは嚴しい氷ははるしするものゝ、何とはなく春近しの氣配が見えて來る。

ストーブに集ふ夜話にも、春の運動會のうはさが出る。全國中等學校の本年度卒業選手の行方等が新聞に現はれて來る。殊に野球、陸上競技などは春の新陣容に重大な關係があるところから、目をみはつてその行動を眺めてゐる。

ジヤベリン
渾身のちからに投げし槍のひかり消えつとみればなほも飛びゐる
百メートル
初一歩を蹴てひたはしる靴うらの釘あとかるく地にものこらず

土岐善麿

昭和四年

アサヒ日記附錄

目次

小學生の國史年表……一
御紋章及御簒章、國旗……一
宮城、皇宮、御所、離宮……五
御陵墓、宮內省牧場……八
神宮及官國幣社一覽……九
主要官廳……一一
爵位勳功……一二
日本の經緯度、面積と周圍……一三
府縣別面積、人口、都市人口……一四
主な高山……一六
大沼湖、大原野……一七
主要長橋、著名溫泉……一八
主な河川……一九
主要公園……二〇
諸觀覽施設、圖書館……二一
東京各地間距離、兵役……二二
陸軍、海軍……二三
東京、大阪、仙台間空中輸送……二六
世界の經緯度、大洲と大洋……二七
外國郵便到着日數……二八
各國標準時比較、ラヂオ局數……二九
重要發明年表、各國祝祭日……三〇
男子競技記錄……三一
女子競技記錄……三三
度量衡メートル法……三三
日本學童競技記錄……三四
活字の大小、書籍の寸法……三六
內國及外國郵便……三七

太陽と地球の話……三九
月と星の話……四〇
風の話……四一
雲の話……四二
暦の話……四三
議會の話……四四
地方自治の話……四六
ラヂオの話……四七
燈台の話……四八
飛行船の話……四九
飛行機の話……五〇
電車の話……五一
汽車の話……五二
電信の話……五三
電話の話……五四
電氣の話……五五
瓦斯の話……五六
水道の話……五七
寫眞の話……五八
活動寫眞の話……五九
電送寫眞の話……六〇
船の話……六一
新聞の話……六二
印刷の話……六三
音樂の話……六四
ローマ字日本語の話……六六
ローマ字表……六八
時間表……六九

課外讀物

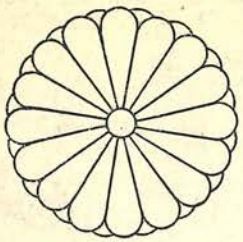
月日	書名	月日	書名

紋章及旗章

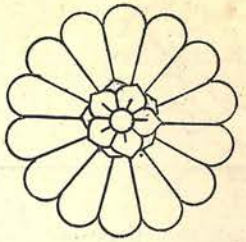
（宮内省御許可
皇室儀制令抄）

御紋章

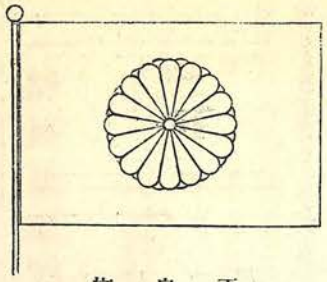
天皇、太皇太后、皇太后、皇后、皇太子、皇太子妃、皇太孫、皇太孫妃の紋章は十六葉八重表菊形。（第十二條）



親王、親王妃、內親王、王、王妃、女王の紋章を十四葉一重裏菊形として左の様式に依る。（第十三條）



御旗章



天皇旗

小學生の國史年表

御代歌	天皇	年號	紀元	
1	神武	（即位前）辛酉	一	即位の禮を大和橿原宮に行はせられる（紀元元年、橿原神宮）
10	崇神	六	二五九	神鏡を大和笠縫邑にうつし皇祖天照大神をお祭りになる
11	垂仁	二五	二六六	天照大神を伊勢五十鈴川の上にうつし祭らる（皇大神宮）
12	景行	二七	二七二	皇子日本武尊が熊襲をお討ちになる
	同	四〇	七一〇	日本武尊蝦夷の征討に從はせられる（機津、走水の御陵、熱田神宮）
14	仲哀	九	八六〇	神功皇后新羅を討ちたまふ
15	應神	八三	九四三	秦人弓月君が多くの人々をひきつれて歸化し機織に從事する
16	仁德		八五	王仁が百濟より來朝して論語などの書を奉る（我學問教のはじめ）
			九四五	勅して三年の間の稅を免じたまふ
21	雄略	四	九六〇	この頃織縫工、陶工、畫工等がしきりに朝鮮及び支那から渡來する

29	欽明	一三	二五二	百濟王より佛像經文等を獻じて來る（佛教のはじめ）
33	推古	二二	二六四	聖德太子十七條の憲法をわかちたまふ
	同	一五	二六七	小野妹子を隋に遣はし支那との交際をはじめらる（日出處の天子書を日沒處の天子に敎す）
	同	二五		聖德太子大和に法隆寺をお建てになる（わが國に存する最古の建築）
35	皇極	四	二〇五	蘇我蝦夷・入鹿の父子滅さる
36	孝德	大化元	六四五	大化の新政（私有の土地・人民をすべて朝廷に收められた上田地をわかちたまひ租・庸・調の稅制を新たに定められる）はじまる
37	齊明	四	六五八	阿倍比羅夫等が日本海岸方面の蝦夷を討つ
38	天智	二	六六三	わが軍百濟を救はうとして利を失ふ（百濟・高麗相ついで滅び新羅が朝鮮を統一す）
	同	八	六六九	藤原鎌足薨ず（談山神社）
42	文武	大寶元	七〇一	大寶律令出來あがる
43	元明	和銅	七〇八	都を奈良にさだめたまふ（延曆三年（一七八四）都が山城長岡にうつるまで御七代七五年間）
45	聖武	天平元	七二九	藤原光明子（藤原の無女）を皇后に立てたまふ
	同	一三	七四一	勅して國ごとに國分寺を造らしめらる
	同	一九	七四五	東大寺の大佛を鑄しめらる
48	稱德	神護景雲	七六七	和氣清麻呂宇佐八幡の敎を奏し道鏡の非望をくじく（譯

（模範日記）

月　日

曜

天氣

（切取線）

みなさん、この日記帳をつけてみて、いろ〳〵お氣づきになつたことがありませうから、それをハガキにかいて左のところへ送つて下さい。そのなかで、編輯委員の參考になつた御注意に對しては、お禮をいたします。

東京市麹町有樂町
東京朝日新聞社内
アサヒ日記編輯係

昭和三年十月廿日印刷
昭和三年十一月一日發行
（定價六十錢）

東京市麹町區有樂町三ノ一
編輯兼發行人　刀禰館正雄
東京市本郷區眞砂町廿六
印刷人　左手薫

發行所　東京　大阪　朝日新聞社

複製を許さず